
奏音-kanon-

紅蘭リト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏音 - k a n o n -

【Nコード】

N 0 4 5 7 F

【作者名】

紅蘭リト

【あらすじ】

天才とは私は違う。だけど、負けない事がある。由宇夜【ユウヤ】は唄う事が好きな少女。叶多【カナタ】は天才的なピアノを弾く。二人の音楽は今一つとなる。

小さな港町。

誰も通らないような場所で、あいつと音を奏でてる。

それが、当たり前になっっているのがなんだか悔しくて、齒痒かった。

何度も夢見た。

大きな舞台で歌を唄う。

沢山の歓声に包まれ、拍手がなりやまない。

そんな夢を。でも、現実はそのなに甘くは無く、裏切られた。

悔しくて泣いた夜。

叫びちらした。

もう、唄うのを辞めようと思った。

「ふざけんな。根性なし。」

あいつは私にそう言い放った。

普通は励ますものでしょ。でも、あいつらしくて、笑みが溢れた。

「ゆうゝやゝ？」

「え？」

いきなり話しかけられて心臓が飛び上がった。

「練習：しねえの？」

「するよ！考え事してただけ。」

あいつ…叶多はピアノの鍵盤をおした。

「今日の晩御飯は何かなあゝ、ってか？」

「それは叶多でしょ。」

叶多は苦笑しながらアタリと言った。

「ねえ、叶多はピアノを辞めようとは思わないの？」

「は？」

叶多は驚いた顔をして、『別れの曲』を弾きは始めた。
やっぱり叶多は上手い。

繊細で優雅ながらも、大胆で正確で…

天才と言っ言葉がぴったりの演奏。

「俺はさ、ピアノを弾くの好き。時には嫌になるけど、思い通りに演奏出来ると嬉しいし。」

叶多と私は違う。

同じ音楽が好きでも、私は叶多みたいに純粹に唄う事はできないよ。
「いわゆる、中毒みたいに弾くのをやめられなくなる。お前もそうなんじゃねえ？」

『中毒』

確かにそうなのかも知れない。なにかに取り付かれたように唄う。
だけどね、私は唄うのが好きはなすなのに唄うのが辛いんだ。

「私、帰る。」

「は！？由宇夜！なんで。」

「用事なの。」

さっさとカバンを持って、スタジオこと、音楽室を出た。

居たたまれない。

叶多と合わせるのは好き。でも、比べられるように見られるのが嫌い。

わがままで、どうしようもない私を叶多は見てくれる。私は叶多に甘えてちゃ駄目だ。

港を通る。

此所で初めて叶多と会った。
聴いた事もないメロディーを唄う変な人だった。
次に会ったのは音楽室。

別のクラスの転校生だった叶多は、やっぱりプロ並のピアノを弾いていた。

それに合わせ、私は唄った。

曲が終わると叶多は私に笑いかけた。

「いい声してるな。唄うの好き？名前は？」

それから私たちは音楽室で、叶多のピアノに合わせて演奏したね。

「ゆうや、カナタ君が呼んでるよ！」

叶多はドアにもたれるように立っていた。

「叶多。」私が呼ぶと満面の笑みを浮かべた。

「すげえ良い曲作れた！」

半ば強制的に叶多に連れられ音楽室に…
放課後だから良いものの…

叶多は切ないメロディーを奏で始めた。

私は心臓が跳ね上がるのが分かった。

この曲を聴くのが辛い。

凶星を指される感じ。

「やめて！」

叶多はびっくりして弾くのを止めた。

「どした？良い曲だろ？『ゆうや』」

やっぱり。

私の曲なんだ。

「唄えよ。」

「唄えない。」

私はこの曲みたいに綺麗じゃない。

何も知らないくせに、私の曲を作らないで。

私を分かつとしないくせに。

「なんで。唄えって。」

「私はッ！叶多とは違う…」

「何が！何が違うんだよ！？」

叶多は私とは違うよね。

私は汚いもんね。

「叶多は才能があつて良いよ！唄うも唄わないも私の勝手でしょ！
叶多のために唄ってくれる人いっぱい居るでしょ？」

「俺は由宇夜が良い。」

「綺麗事言わないで。そんなに唄ってほしいならコンクールにでれば！？コンクールに出たら注目されて、私なんて忘れるくらい忙しくなるよ。絶対。」

「…分かった。」

こんな事言つつもりなかつたのに。

今からでもごめんって言えば…

私に唄ってほしいって言ってくれて嬉しかった。

それから何時も聞こえていた叶多のピアノが聞こえなくなった。

ねえ、叶多。

私の歌は貴方に少しでも幸せを与えられましたか？

私は貴方の奏でる音楽に、時には追い詰められ、

時には救われたよ。

家で歌詞を書こうと、歌詞ノートを開いた。

一ページ目には慣れない歌詞が書いてある。

ページが増えるにつれ、私の書く詞は上達していた。私でも、少しは変わっていた。

私は少し安心した。

ノートの半分くらいから詞は書いていない。

でも、最後のページにはぎっしりと詞が書いてあった。

題名は『奏音& a m p ; 歌音』

この曲は…

私は知らず知らずにこの歌を唄っていた。

【小さな不安は夢に埋もれた。優しい貴方の言葉に溺れて行った。もう大丈夫だよ。貴方は音を奏でて。私は声が枯れるまで唄い続けるから。】

私の誕生日に名前もないこの曲を叶多は弾いた。

静かで美しく、

私は一度聞いたときからこの曲が大好きになった。

「ね、名前付けないの？」

叶多は小さく笑った。

「名前は…奏音。音を奏でて、周りの奴等を幸せに。って」

「イメージに合わないよ！なんか奏音って叶多みたい。」

「良い名前だろ？俺にもお前にもぴったりだし。」

叶多は嬉しそうに笑った。

「私は奏音より歌音だよ。奏でられないし、歌で音を出す。」

「んじゃ、奏音& a m p ; 歌音で良くね？叶多& a m p ; 由宇夜って意味で。」

「私達のテーマソング？」

【私達は苦しい思い出をノートに閉じ込める。だから前を向こう。辛い事は誰にも話す事は出来ないから。音楽にのせて、理想を生み出すんだ。】

私の理想は…

「由宇夜、俺再来週の土曜日、コンクールに出るから。良かったら見に来て。俺はお前とは確かに違うかも知れない。でも、音楽が好きだから。」

「…本当にコンクールに出るの？私の言うことなんて気にしないで。」

「お前と会う前はずっと練習してコンクールに出ての繰り返しだったし、前までの生活に戻るだけ。」

叶多は哀しそうに笑っていた。

コンクール会場に私は走った。

出場者はやっぱり上手くて、魅了された。

叶多は真顔で舞台上上がった。

叶多は教本通りの演奏をした。違う。

これは叶多の音じゃない。ただの「コピー」。

私の好きな叶多の音じゃない。

審査員は叶多の音を聞くと目をつぶり聞き入った。

「凄い、上手いな。」

確かに上手い。

でも、叶多、違うでしょ？

叶多は急に弾くのを止めた。次の瞬間、指定された曲じゃない曲を弾き始めた。

『奏音&・歌音』

叶多は叶多の音を奏で始めた。気持ちのこもった、叶多だけの音楽を…

一人の審査員が叶多を止めようとしたが、他の審査員がそれを止めた。

皆が叶多の音楽を聞き入る。演奏が終わると大きな歓声が叶多を包んだ。

「叶多！何してるの！あの曲演奏して。」

「由宇夜、来てたんだ…。だってさ、途中で俺の音じゃない！って思ってたさ、俺の音は…って考えたらあの曲が浮かんだんだよねあ。

結果。見に行くぞ。」

やっぱり叶多は最下位で。叶多もそりゃそうだと笑った。

「初めのまま弾いてたら一位だったのに。」

叶多は私の頭をポンポンと叩いた。

「ねえ、叶多。私、音楽が好きだよ。叶多みたいに才能ないし、やっぱり叶多とは違う。でも、叶多が私で良いって言ってくれるなら私は唄いたい。」

「よく言えました。」

「私は『ゆつや』ほど綺麗な人間じゃない。けど、イメージに合う

ようなゆうやになる。」

「『ゆうや』は由宇夜じゃない。でも、由宇夜が俺を越える、『ゆうや』に合う由宇夜になるなら協力してやる。」

音楽は幸せを運ぶ。

私は辛くて歌を辞めようと何度も思った。

でも、惹き付けられる。

だって好きだから。

ちよつと俺様で、

能天気な叶多のピアノが私は好き。

愛しい音楽を

愛しい歌を

愛しいあの音を

現実 is 厳しいけれど

音楽を奏でよう。

それは、私の在り方、存在理由だから。

【小さな小鳥は天空へ飛び立つ。綺麗な声でないで。綺麗な声で音を奏でて。私が傍にいるから。】

（後書き）

音楽は時には心を落ち着かせます。そんな音楽を奏でる二人は輝いていると思います。この小説を呼んで頂いて有り難うございます。どうだったでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0457f/>

奏音-kanon-

2010年10月20日13時58分発行